有島武郎研究

―著作集第五輯『迷路』をめぐって(一)―

宮野光男

一

有島武郎著作集第五輯『迷路』〔大7・6〕には、ホイットマン詩"Long, Too Long, O Land"がエピグラフとして掲げられている。

この詩篇は、ホイットマン詩のなかでは、〈南北の抗争とその克服を主題とする詩集『軍鼓のひびき』(註1)〉のなかに収められていた小品で、一八六五年初出当時は、『草の葉』には未編入の作品であったが、一八八一年、『草の葉』第七版出版のとき、定稿として初めて編入されたものである。

全体的には、〈アメリカの現在を憂え、その未来のために戦うことを呼びかけるというモチーフで歌われており〉、ホイットマンは、〈アメリカの未来をさし示す予言者〉としての自己を歌い出している作品だと言われている。(註2)

〈『軍鼓のひびき』には『草の葉』のような惑乱がいささかもありません〉と、オコンナー宛の書簡に書いていることが伝えられているように、(註3)この詩篇自身のもっている調子は高いように思われる。

ところで、この詩篇には有島の訳もなく、そのホイットマン論のなかにもとりあげられておらず、有島がこの詩篇に対していかなる関心を持っていたのかを知る直接的な手がかりはないが、著作集のエピグラフに採用しているということが、まず、有島にとって意味のある詩篇であったことを示す何よりの証明にちがいない。

それでは、どこに力点が置かれていたのかと言えば、まず第一に〈Land〉に対する呼びかけに、ではないだろうかと思われる。

定稿からも明らかなように、〈Land〉が〈America〉を意味していることはいうまでもないことであるが、ホイットマンのアメリカに対する思いは、その可能性への信頼が、現状認識における否定を、一種のスプリング・ボードにしながら語られているところからも明らかなように、肯定的である。

長いあいだ、あまりにも長いあいだアメリカよ、
平坦きわまる平和な道をずっと旅してきたあなたは、ただ喜びと
繁栄だけから学んできたが、

しかしいま、ああ、いまこそあなたは進み出て、このうえなく恐ろしい運命と四つに組み、いささかも怯むことなく、苦悶の叫びから学ばねばならぬ、
そしていまこそ肩を組み合うわが子供らのまことの価値を思いみて、それを世界に示さねばならぬ、
（あなたの子らの集団にそなわる真価をこれまでに思いみたのはわたしをおいて誰がいたか）[註4]

清水春雄氏が、『ホイットマンの心象研究』[註5]において、ホイットマンがアメリカを歌う場合、〈すべての人、すべてのものを産む母胎として、一切のものにとって霊肉具現の場として、「一切の母」（Mother of All）と考えられる場合が多い〉と指摘しているように、ホイットマンの、アメリカにみている可能性は、〈宇宙に漲る生産の力、性による増殖の力、そしてそれこそ永遠の生命をもたらす根元〉[註6]に支えられた〈自由〉と〈生産繁栄〉であり、そこに溢れる〈永遠性〉とであることが考えられているのであるが、このような生命力、活力が、有島に、根源的な生の可能性の根拠として受容されることは、充分にありうることなのである。

さらに、このアメリカが、〈広く「大地」とか、「自然」の意に解しても何らかの矛盾がない〉[註7]ものでもあるといわれている。

たとえば、

死んだわが子を悲しげに見つめながら「全体の母」のあげる声を
わたしは聞いた、
引き裂かれた死体を、戦場をおおうからだを絶望の眼（まなこ）で見つめながら、
（最後の銃声がやみ、しかし硝煙のにおいが今も漂う中で）
ゆったりと歩きまわりつつ悲しげな声で大地に向かって呼びかける声を、
この子らをしっかり吸いこんでおくれおおわたしの大地よ、彼女は叫んだ、〔以下略〕〔「死んだわが子を悲しげに見つめながら」〕

と歌われている〈わたし〉であるところの〈全体の母〉は、自然そのものだ、というのである。[註8]

すでに述べてきたように、ホイットマンの自然は、その背後に、永遠性・普遍性・神秘性をもった存在であった。いやむしろ、具体的な自然は、人間をも含めて、その象徴的表現でもあったのである。もち論、そこには、ホイットマン自身の憧憬を見なくてはならないと思われるのであるが、有島が、そのホイットマンに共感したであろうことは想像に難くないところである。

＊

エピグラフとして掲げられた詩篇のもうひとつのポイントは〈children〉である。

ホイットマン詩における children の解釈の可能性について考える場合、「アダムの子供たち」が、多くの示唆を与えてくれるようである。

エマソンの忠告のエピソードが[註9]語られているこの詩群を通して知

ることのできる子供たちのイメージは、人間存在そのものである。さらに限定した言いかたをするならば、それは性的人間ということにもなる。しかし、ホイットマンによれば、そのような存在こそ、完全な、健康な人間であり、最も自然的な存在なのである。〈性は自然の働き〉[註10]であり、〈自然はすべて性的である〉[註11]というわけである。

先にみたアメリカにおける自然性と、子供たちにおける自然性とが、有島の憧憬の対象であるという意味において等質であることは言うまでもないことである。

二

有島は、明治三十六年一月八日の日記に、森本厚吉と新渡戸稲造を訪問し、将来の計画について相談したことをつぎのように記している。

今日はこれ余にとりて実に将来の行動を決すべき日なり。余は兄と相語り相一致したる責務を果すべく外遊するの得策なるを思ひ、これを謀りしに幸にして先生の賛成を得たり。

森本厚吉と〈相語り相一致したる責務〉が教育に関することであったことは、〈昨日我が愛するもの来りぬ。我は彼と神田を逍遙しつゝ半日の清談に耽りぬ。彼は我と共に教育の事に従事せずやと云ふ。我が心は我が口より前によしと云ひぬ〉〔日記、明35・12・31〕というところからも明らかである。[註12]

それより前に、内村鑑三を訪問、〈洋行反対論〉〔同、1・5〕を説かれていた両人は、ここに来てようやく、将来への具体的指針を得ることができたのである。

つまり、有島にとって、アメリカ留学は、教育に従事するための準備行動だったのであるが、そのための学校選びが、ハバフォード大学であり、履習した科目が、英国史、中世史、経済学〔労働問題〕及び独語であったこと、提出した論文が「日本文明の発展―神話時代から将軍家の滅亡まで―」であったということは、有島の教育観のいかなるものであったかを、よく物語っているのである。

事の困難なるも目前に瞭々たるもの御座候へ共、将来出来る限りの力を振つて人生最初の戦闘に戦つて見んとするの念は胸中に燃え居り申候。事業と申候は筆を通してなさるゝ広義に於ての教育事業に有之候。〔両親宛書簡、明39・5・20〕

と述べているように、教育という概念はかなり自由に拡大されており、本音のところは、むしろ、〈筆をとりて世に立つ〉〔同、4・4〕ことにあったということもできるのである。

もち論、その背景には、有島の人間志向が根ざしていたことは疑いないことである。

すでに述べたように、[註13]フレンド精神病院における体験が、新らしい人間発見の契機であり、人間追究が、有島の内外から生じた焦眉の急務であったことも、その傾向のひとつの顕われなのである。

その意味では、有島のアメリカを去る際のアメリカに関する感想―ファニーに捧げられた日記の中に見られる―は、有島にとって、現実のアメリカが何であったかを、そして、アメリカへの期待を通して、有島が求めていたものが何であるかを知ることのできる、ひとつの有力な手がかりだということができるのである。

＊此国が、自己を考へさせ、自由な思索をなさしめた事を何よりも先きに言はねばならない。小児のやうに自由に生活し、自己の建設・思想の建設等に多くの事を為し得た。

＊〔けれど〕一つの事がまだ出来ずに居るのです。行為と言はず、思想の独立を得ようと努めて来た。然し、依然として、因襲・伝統の奴隷である。因襲・伝統を嫌悪し、恐怖する。何故に、―得て彼等に支配されがちだからである。あゝ、思想・行為等に於て独立自存となり得た日が来たら、どれ程喜ばしい事であらう。

＊物知り人達が何と言ふとも、人心には隔りのあるものではないと、堅く信じ知り得たのです。人心とは、同じで、ただ一つのものなのだ。人心は、限りなく、凡てに拡がり、凡てに充満して居る。君も我も、この人心を分ち持つて居る。伝統と肉の衣を脱し去つたならば、さうしたならば、その時、我等は皆一にして、同じである。〔中略〕何時の日にか、真の愛がその真価を示し、凡ての人間の思想・行為の凡ての結果の内の最上のものとなる時が来るといふ望みを抱いても、ファニーよ、あなたは愚かな男だとお思ひにはなりますまい。

＊自分に欠けてゐればゐるだけ、アメリカ国民にある博愛・強健・寛大の心には驚歎したのです。この国民が、何時の日にか、旧い伝統の夢から醒めて、世界兄弟への進歩の先駆となる、と云ふ望を抱かざるを得ないのです。〔日記、明39・9・1、原文英文〕

もち論、いわゆるアメリカニズムへの批判、＜拝金宗＞と、＜婦人の行動＞に対する嫌悪感を述べている〔両親宛書簡、明36・11・7〕有島であり、

朝は市の其処此処、午後はサンマルチノと申す僧院の丘上にあるを訪ひ、下瞰の勝景と院内の古物とにて、米国にて得来りたる物質熱を心地よく洗ひ去り申候。〔同、明39・9・16〕

と、ヨーロッパの豊かな精神性に触れた喜びを伝えている有島でもあるが、反面、アメリカ人のもっている再生の活力への驚嘆は、エマソンより得た、＜「汝、汝の伝統を蟬蛻せよ」＞〔日記、明38・1・8〕という標語(注14)の実現可能性への讃美となっていることを、ファニーに捧げられた日記の記事は、みごとに表わしているのである。

『迷路』が、＜有島武郎が自らの自我を凝視し、その本質を剔抉しようと図った必死な観念的私小説＞(注15)だという説がある。たしかに、＜自分の内心の救ひに餘りに熱中してゐる＞〔日記、大5・3・29〕自らであることを反省しなくてはならなかったということや、＜内的経験＞を、＜幾多の試練を経た＞ところの、＜精神的革命の時代＞〔同、7・11〕として描こうとしたことが、『迷路』序篇「首途」、あるいは「迷路」について言われていることからみて、鋭い

指摘である。そして、さらに、〈私の眼ざしたい事はあの迷ひの中に現代青年の善き迷ひを描かうとした事です。あの迷ひを通らなければ新らしい肯定の時代は生れないと思つたのです〉〔「川上満氏の評論を読みて」大7・4〕という自註が示しているように、描かれている内面の世界は、エピグラフに示されている肯定性を前提とした否定の世界における〈迷い〉であることが、この作品のもっている振幅の下死点の特色なのである。

三

『迷路』が、大正五年から七年にかけて書かれた作品であるということは、素材としてとりあげられているのが、明治三十七年以後の、アメリカ留学時代後半の生活であったとしても、当時の精神状況の単純な再現ではなく、作品に描かれている世界は、あくまでも執筆当時の、米国留学当時の精神状況に対する解釈、もしくは執筆当時の精神状況の移入であるにちがいない。

なぜ、このようなことわりかたをしたかというと、素材となっている日記と作品との間に見られる最も大きな変化として、両者に見られる新生への願いが、一方ではキリスト教信仰に基づいたものであるのに対して、[註16]他方では、意識的に、キリスト教信仰ぬきの新生願望が、ホイットマン詩にある可能性に支えられてなされているのではないかと思われるからである。

そのことを無視した結果、安易に、アメリカ留学時におけるキリスト教離反説を導き出してしまうことへの、一種の反省でもあるが、それはともかくとしても、その有島の企図がいかなる結果を招来するかについては、先に述べたような、有島自身の自覚的予測もさることながら、予測せざる状況に立ち到っている有島発見の可能性もあるわけで、以下にその具体相を探ってみたいと思うのである。

＊

作品の世界で、繰り返しなされてきた不信仰宣言—それは一面において人間回復宣言でもあったのだが—は、『迷路』序篇「首途」の冒頭では、〈僕は祈りたい。然し祈れない〉〔某年八月十四日〕という独白として表現されている。

そして、文字通り祈りの生活であった、明治三十七年当時のフレンド精神病院の看護夫生活を、有島は〈涙〉の生活だったと言うのである。

未知の世界に投げ出された赤子のやうに、僕は途方に暮れて泣き出さうとする。以前には泣くと救ひの手が現はれた。今は泣いても僕を省（かへりみ）るものはない。僕は泣かうとして思はず苦い涙を飲み込んでしまふ。泣くのも亦無益だと知るからだ。〔某年八月十七日〕

〈僕は祈りたい。然し祈れない〉というAにとって、本来ならば、〈以前には祈ると救ひの手が現はれた〉〔傍点宮野〕とすべきところを、あえて〈泣く〉と云い変えたところに、かつての〈涙もて祈り〉〔日記、明37・8・16〕をしていた生活それ自体を否定し、当時の祈りが、たんに、主観的な感情表出でしかなかったのだという、大正五年という時点での、明治三十七年当時に対する痛烈な自

己批判を見ることができるところである。

もち論、このことは、新たに書き加えられた不信仰宣言の内容と呼応する—事実関係でいえば、Aの信仰が、〈総ては若い情熱の仕業だったので〉〔某年八月十四日〕というように総括されるものであったことの、具体例として、すでに「首途」の未定稿において書かれていたことであるが—ことがらのひとつである。

このように、「首途」には、日記を素材にしながら、それが大正五年もしくは七年という時点での、信仰離反という事実に基づいた単純な変化の記述だけでなく、明治三十七年当時の有島の生き方に対する、自分自身の批判、換言すれば解釈がなされ、それが描かれているというところに、ひとつの特色を見ることができるのである。

ところで、先の引用は、「首途」におけるAの状況を、よく表わしているように思われる。つまり、〈泣くのも亦無益だと知る〉状況が、である。

〈泣く〉ことが、涙が、無益だ、と思われているのには、二つの理由がある。そのひとつは、祈りに対するたんなるセンチメンタリズムの顕現でしかないという批判に影響された涙批判であることで、〈某年八月十四日〉の末尾の、〈僕は不思議に感傷的になつてゐた。而してふとしんとした夜の沈黙に激動した。熱い涙が思はず眼頭から滲み出た〉、という記述がそれにあたるものである。

いまひとつの理由は、〈以前には泣くと救ひの手が現はれた。今は泣いても僕を省るものはない〉という意味での無益性にある。

これは、換言すれば、省るものへの、激しい希求の顕われである。例の不信仰宣言のことばをもってすれば、神にかわる恋人を、〈愛したい、命をかけて愛したい〉という思いを、受けとめてくれる恋人を求めてやまぬ願いの表白なのである。だから、〈僕は恋人の胸に流す涙を、寝前の祈祷に流してゐた〉ことへの痛悔がなされているのである。

有島の描くAの涙、それは、愛を求めてやまぬ人間の徴表ともいうべきものであろう。ダンテの『神曲』地獄篇、〈第九地獄の果てしもない氷原が寒く広く〉展開するAの内面で、〈その第三界のプトレミヤで苦しみ蹠くフラ・アルベリーゴの姿〉をかりて思い描く〈冱寒の地獄〉における、〈熱い悔恨の涙も亦氷る〉現実、あるいは、〈茵陳（にがよもぎ）のやうな苦い悲しみを吐き出そうとして、涙堂のしぼり出す涙は、流れる間もなく睫毛に凍りついて〉しまう状況から、〈もう一度泣く事の出来る境涯〉を願うことへの共感は、そのことをよく物語っているのである。

もし、そうだとするならば、〈某年九月二日〉の記事に記されている夢の中で、〈心から湧き出るやうな懺悔の涙がじり〳〵と滲み出て来た〉という場面は、〈ダンデのヰタ・ノーバ〉ならぬ、Aの新生願望への可能性を描いたものとして位置づけることができるように思われるのである。

〈この夢の為めに今日一日僕は不思議に清められた意識の中に生活した〉というAであることを、〈又夢をさへ頼まうとする実生活の分解が悲しまれた〉Aであることを、涙への願望は、つまり、愛への願望は、明らかにしているのである。

＊

〈床の上に落ち散つたパンの屑すらが〉、〈「無常を思へ」〉とささやき、〈噪狂患者の病房から〉聞こえてくる〈男女の叫び声〉は、〈何か恐ろしい運命の警告でもあるように、おど〳〵した僕の心を脅か〉すように響いてくる、という、「首途」冒頭の部分の感想〔某年八月十四日〕には、Aの、瘋癲病院での、二ヶ月にわたる看護夫生活の、基本的な状況が示されているのである。

不信仰宣言、それは、元来人間解放を意図した、自律的人間への復帰を意味するものであることは言うまでもないことであり、そこに見出される人間は、〈伝統と因襲を蟬蛻した〉、新しい人間であるはずである。

悪人であれ善人であれ、僕は僕の生活を生きよう。先づ自分に帰ろう。〔同前〕

という思いに、その決意が、希望に裏打ちされて表明されているのであり、これが、有島の魂論、個性論、あるいは本能的生活志向へと展開してゆく可能性を秘めた決意でもあることは、「内部生活の現象」〔大3・7〕、「惜しみなく愛は奪ふ」〔大9・6〕などをみても明らかなことである。

しかし、帰りついた自分自身が、〈見る影もないあばら家〉であり、〈僕を待つものは乱離と荒廃ばかりだつた〉〔同前〕という否定的自己認識は、作品に流れている一種の感傷性を差し引いてみても、なお否み難い実感として、あたかも、それは運命の統流のごとくせまりくる、ある支配力のなさしめる結果のようにも思われるのである。

眼前に、〈果てしもない暗黒が峭壁のやうに果てしもなく連〉り、〈後ろには底無しの深淵が音も立てずに凝然と澱んでゐる〉という認識、しかも、〈死力を尽して自分の周囲から暗黒を追ひ退けようとしてゐる〉にもかかわらず、〈暗黒は動もすれば却つて僕を呑まうと逼つて来る〉〔某年八月二十四日〕という絶望感は、キェルケゴールのいう、〈死ぬことができないというまさにその点に存する〉(註17)ものであることを端的に物語っているのである。

冒頭部分の、

如何かしなければ生きながら死んでゐるのも同然だぞと、胸の中で煮えくりかへるやうに逼つて来るものがある。然し僕には如何していゝのか全く見当の付けやうがないのを如何しよう。〔某年八月十四日〕

という感想は、Aの、自己認識が、その根本において否定であったことをよく表わしているのである。

そして、「首途」において、繰り返されている〈成就か死か〉という呟きは、このような否定的自己認識を基調とした、一種の限界状況の表明であろう。

有島の「ヴランド」論〔明42・6〜43・3〕が、〈神は愛なり〉という天来の声をして、〈これ何等の謎語ぞや〉としなければならなかったところに、信仰離反をした有島の内面性の特色をよく表わ

しているという論がある。(註18)

そのなかで、イブセンの〈凡てか無か〉が、まさに、キェルケゴールのいう、〈神に対しての、全てか、無か〉であったのに対して、有島の所論が、その〈神に対して〉の部分の欠落した問であったところに問題がある、という指摘がなされており、このことは、有島の信仰という側面からの立論としては、まことに正鵠を得たものだということができるのである。

ところで、先に指摘した〈成就か死か〉という呟きは、キェルケゴールがいい、イプセンが受けついだ All or Nothiag の有島的表現だと思われるのであるが、信仰という側面を意識的に排除してしまったこの作品にあっては、有島の意図としては、可能性追究の標語であったにちがいないのであるが、実質的にはおそらく、絶望宣言以外の何ものでもないはずのものであるように思われるのである。

四

それにもかかわらず、〈成就か死か〉という呟きが、一種の可能性追究の意志表明であるということができるとするならば、そこには、〈神に対して〉成就か死か〉を問うかわりの何かが存在していたはずであり、さらには、全存在をかけて問うべき事柄を、実態としてもっていたはずである。

その意味で、「首途」末尾の

成就か死か……唯静かに、静かに、静かに。（後略）〔某年九月五日〕

は含蓄に富んだ表現だと思われるのであるが、まず、有島にとっての、〈神に対して〉にかわる何かの可能性を考えてみたいと思う。

*

「首途」のなかで、Aの精神状況を明らかにする存在として位置づけられている人物の一人が、スコット博士である。

フレンド精神病院での看護夫生活の体験のなかで、事実上、大きな意味をもっていたスコット博士との関係が、作品にも素材として、生かされているのであるが、彼の苦悩を受けとめるAと有島とは、異った立場にあることが明らかである。

スコット博士の告白を聞いて、〈余は奇異なる沈黙を以つて謹み聞きぬ。〔中略〕不可思議なる人生の迷路を解するの如何に難きかを益々思ふ。人生とは実に解き難くむすぼれたる色様々なる糸の如し〉〔日記、明37・8・17〕と観じながら、なお、〈人は唯思ふが儘に深く迷執に固着するこそ面白からずや。悲しむ人には悲しみの中に世界あり。喜ぶ人には喜びの中に世界あり。各個は各個の世界を有す。各己は其王なり、其主権なり。如何なる武器もそを犯し得可きにあらず。余等各己の領土に忠実ならしめよ。人生を力たらしめ光たらしむる所以唯是れのみ〉〔同前〕と、傍観者的であり、かつ、より楽観的ですらある。

此夜スコット氏の pack bath をなす。なし終るや彼は余に祈らん事を乞ふ。余は堪へえずなりて涙もて祈りぬ。〔同、8・16〕

という祈りにしても、あるいは、

スコット氏の病愈々重し。彼は既に人の慰藉を享受し得ずなりぬ。〔中略〕夜々彼と共に祈る時、余の眼は真に悲しき懺悔の涙に濕ふ。御心ならば願くは彼に爾の生命を與へ給はん事を。〔同、8・30〕

にしても、一種の余裕さえ見られるほどの安んじかたなのである。

このことは、スコット博士の死を報じる新聞に接したときの感想に、最も顕著に現われているのである。

主よ、爾は知りませり、余は如何に彼の今一度回復せん事を祈りしかを。如何に彼に忠実ならん事を勉めたりしかを。而して主よ、爾は彼を此世より奪ひ去り給ひぬ。彼の為めには此上なき幸福なりき。余が為めには……余が為めにも亦。

彼は余に偉大なる教訓を遺しぬ。而して彼の死は彼の教訓を益々偉大ならしめぬ。〔同、9・26〕

この祈りには、何よりもまず、予定説―スコット博士の陥っていた地獄の苦悩の本質であるところの―が、みごとに否定されているところに特色がある。天国を信じる者のみが〈彼の為めには此上なき幸福なりき〉と言うことができるのであり、この日記を書いている有島が、この時に、本質においてキリスト者であったことを知ることができるところでもある。

作品のなかでは、祈りを否定するAであってみれば、スコット博士のために祈ることはありえないのは当然のことであるが、それだけではなく、彼の問題に対して、傍観者的態度で接することの出来ないAが描かれているところに、その一つの特色を見ることができるのである。

午後スコット博士と庭を歩きながら図ず心霊上の諸問題を話し合つた。彼の心中にも矢張り色々な葛藤があるのだ。〔中略〕かくて博士の理論は果てしのない円周を果てしもなくぐる〳〵とめぐつてゐる。その議論を聞いてゐるとひとりでに輪廻とか予定とかいふやうな事を暗示されて恐ろしくなる位だ。〔某年八月二十四日〕

先の、明治三十七年八月十七日の日記に該当する部分であるが、その差は明確である。

スコット博士の告白にみられる〈運命〉観の内容が、〈「貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた霊魂だぞ」〉〔同前〕と、〈神に呪われた身である〉〔同前〕との自己認識であることに対して、それが〈神学〉であるが故に、意識的には否定し去ることができるものであるにもかかわらず、

……然し牧師が博士を狂気にしなかつたら、石が狂気にしてゐたかも知れない。牧師が博士を殺さなかつたら塵が殺してゐたかも知れない。牧師も亦大きな無情な歯車の歯の一つに過ぎないのではないか。今僕の心には世界が氷つてしまつたやうに見える。

〔某年八月二十九日〕

と言わざるを得なかったところに、〈予定〉、〈輪廻〉が、無色透明化された運命観として、Aの内面に定着してしまっていることを知ることができるのである。

そして、その問題が、結果はAの、〈自由論と決定論〉の問題として、〈単なる知的遊戯ではなく、〈僕の二元的な性格の根柢から湧き出て来る厳粛な問題〉〔某年八月三十一日〕として認識されているのであるが、それは、〈誰が真に運命を感じ得るか。誰が真に運命を知り得るか。運命を感じ運命を知るものは運命ばかりだ〉ということを知ったAが、〈自己の行為なり思想なりを運命に辯疏させて平気でゐる程厚かましくはない〉としながらも、なお、〈僕はスコット博士の宿命説に極力反対してゐる。それは然し僕の小さな策略に過ぎない。僕の心に確信があるからではない。僕は口では反対しながら、如何かすると心の中で両手を挙げて賛成してゐる〉〔同前〕Aでもあることを示しているのである。

Aにおける運命観が、当時の有島の運命観、換言すれば、明治三十七年当時の摂理観批判でもあるが、に基づいたものであることについては、すでに述べたところであるが、[註19] このような心的状況の者にとって、スコット博士の死は、もはや他人ごとではなかったはずで、それは、「迷路」本篇に受けつがれているAの否定的自己認識の基調となる状況認識であったにちがいない。

〈「成就か死か」〉という「首途」の末尾部分の呟きは、その端的な表白ということができるものなのである。

*

「首途」のなかで、Aの精神状況を明らかにする、もうひとりの存在として描かれているのはリリイである。

すでに指摘されているように、明治三十七年当時、しきりに日記に登場するファニー[註20]への言及がないことも、「首途」のひとつの特色であるが、それと同時に、リリイ像形象にあたっての、日記における実像との変化のなかに、有島の問題点を見ることができるのである。

初めての出会の時や、百合の花のエピソードの感想が、〈偽善〉とか〈罪〉という発想からなされていたのに対し、作品では〈送別会の夜からリリイはこの病院に於ける僕の生活の必要物となってしまったのだ〉〔某年八月十七日〕と、全面的に肯定的存在として受け入れられ、しかも、〈病的と云ひたいほど童女に対して執着の強い僕に取つて、この悲惨な不幸人の集合所に、この淋しい荒んだ僕の境涯にリリイを見出したのは、云ひ現はし難い慰藉だ〉〔同前〕という位置づけかたには、『宣言』のY子像に対するBの女性観をも見ることができるのであって、[註21] 現実のリリイとファニーとの対立のなかにあって位置づけられていたリリイとは、その本質において異った存在だということができるのである。――ちなみに、百合の花のエピソードに関する有島とAの、百合の花に託した内面表出にも、〈―若し朝露の恵深からば―猶しぼまずしてある三輪の真白き花〉に対して、たとえ、それがリリイにいかなる印象を与えたとしても、〈余が心は衷心より満足を感ずるなり〉〔日記、明37・7・29〕というものだったのに対して、〈百合の花は旭の光に電灯が消

えるやうに萎んでしまふだらう。僕のすることにはそんな運命が一番起りさうな事だ〉〔某年八月二十一日〕と、はなはだペシミスティックな感懐が述べられており、これも、先に述べたAの否定的自己認識のひとつの顕現であり、有島の当時の人間観の、作品における主調音の象徴的表現ということができるところであるように思われるのである。

すでに述べてきたように、作品におけるリリイ像が、『宣言』のY子像のひとつのヴァリエーションであるということは、ファニー像によって象徴的に思い描かれた〈聖性〉の顕現でもあるが、そのことを端的に表わしているのが〈夢〉のエピソードなのである。

〈此夜 Lily を夢む。〔中略〕ロバーッと彼女と突然余が眠れる床の傍に立てりと夢む。彼女は雪白の衣を着けて頭に真紅なるリボンを結べりき〉〔日記、明37・8・5〕が下敷になっているこの夢物語は、バーン・ジョーンズが描くところの「黄金の階段」の趣きのある、多分にラファエル前派的色彩の濃い、〈羅馬の昔にあつたやうな大浴場〉での出来事が、幻想的に語られているのであるが、リリイと見まちがえた少女イッポリータが浴池より取り上げたものが、例の〈白い百合の花〉で、〈「あなたはそれを召上らなければいけません」〉という声に驚かされてよく見ると、〈それは生々しい真赤な小さな心臓だつた。〔中略〕「それは、あの盲ひたビヤトリスの可愛いゝ心臓でございます。真紅の衣を着けた『愛』が持つて参りました。召上れ」〉という声に、〈「僕はダンテのギタ・ノーバを思ひ出してゐるのだ」……僕は夢の中でさう思つた〉〔某年九月二日〕、というこの話は、有島自身が述べているように、ダンテの「新生」[註22]にひとつの典拠があることは、すでに指摘されていることであるが、このところにAの、「首途」における状況の一面を、最も端的に表明しているように思われるのである。

それは、一方において、新生願望、しかも愛における新生願望なのである。

なぜビヤトリスが盲ていなければならなかったのか、という問がなされるところでもあるが、有島の求めてやまぬ愛の可能性が、ついには、〈瞳なき眼〉として、その憧憬の深さとともに、不可能性がうたい出されなければならなかったところの、その遠因を見ることができるところであるかもわからないが[註23]、それはともかくとして、〈〔そんな事を思ひながら〕僕はリリイに対して抱いてゐた不純らしい心を鞭たれるやうに思つた〉〔同前〕と、この夢物語をしめくくっているところからも明らかであるように、そしてまた、実際には、ファニーへの想いを語る部分で引かれているギド・カバルカンティの詩が[註24]、リリイへの想いを語る部分で引かれている〔同前〕ことからして、リリイがリリイ像であることにおいてファニイ像でもあることを知ることができるのであるが、それは、同時に、

この夢の為めに今日一日僕は不思議に清められた意識の中に生活した。九月から展開する大学の新しい生活に、何物かを期待した幼稚な考へまでが今は憐れまれた。又新しい荒野が僕の前には展けようとしてゐる。そこを旅して行く唯一人の旅客。夕べ〳〵には石を枕にして冷やかに眠らねばなるまい。朝な〳〵には長い一つの影を牽いて淋しく歩まねばなるまい。〔同前〕

と、人間が、孤独な存在であり、愛なき生活であるかぎり、いかなる状況にあっても、人生は〈荒野〉でしかないものであることを表わしているところでもある。

＊

〈……唯静かに、静かに、静かに〉、とAは呟いている。いったいAは、〈静かに〉どうしようというのであろうか。何を聞こうというのであろうか。

〈「無常を思へ」〉〔某年八月十四日〕という声を、あるいは、〈何か恐ろしい運命の警告〉〔同前〕を、であろうか。

謎語のように呟かれている、この〈静かに〉が、やがて、ひとつの意味をもつ世界が、以後展開されている「迷路」本篇なのであろうか。

それは、エピグラフに示されている可能性追究の世界でもあろう。「迷路」序篇「首途」において明らかになった、神にかわるべき運命との関わりにおいて、それ自身がいかに展開するかが問われ、そのなかにあって求め続けられる愛の発見の可能性が、改めて問われる世界でもある。

註

1・2・3　酒本雅之「解説」〔ホイットマン詩集『草の葉』下、鍋島能弘、酒本雅弘訳、昭46・7　岩波文庫〕

4　参考までに、岩波文庫版の訳〔中　昭54・8〕を掲げる。

5・6・7・10・11　昭43・11、訂正版、篠崎書林

8　註5に同じ。同書に紹介されている Allen, The Solitary Singer の説である。

9　「ボストン・コンモン―さらにエマソンについて―」〔『ホイットマン自選日記』下、杉本喬訳　昭43・6　岩波文庫〕

12・14　「有島武郎と末光績」〔「国文学研究」第一号　昭40・11〕

13・16　「フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察」〔梅光女学院短大「紀要」I、文学論集 (1)　昭39・6〕

15　野島秀勝「『迷路』―始めと終り、一つの渾沌」〔瀬沼茂樹・本多秋五編『有島武郎研究』　昭47・11　右文書院〕

17　『死に至る病』〔斎藤信治訳　昭55・9　岩波文庫〕

18　川鎮郎「有島武郎とイプセン作「ブランド」―彼のキリスト教理解の問題―」〔国際基督教大学学報「人文科学研究―キリスト教と文化―5」　昭45・5〕

19　「運命観をめぐって」〔「国文学研究」第三号　昭42・11〕

20　「ファニー像にみられる聖性憧憬の考察」〔「国文学研究」第九号　昭48・11〕

21　①「有島武郎研究―瞳憧憬をめぐって―」〔「日本文学研究」第十号　昭49・11〕

②「有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈢―」〔同、第十三号　昭54・11〕

22・24　①江頭太助「有島武郎『迷路』論のこころみ㈠」―リリイ像の形象過程を中心に―〔北九州大学文学部「紀要」記念号別刷昭51・10〕、②同「有島武郎『迷路』論のためのノート㈣」―ファニー像の意味するもの―〔同、第一四号　昭50・12〕

23　「有島武郎研究―盲目状況認識をめぐって―」〔「評言と構想」第三号　昭50・10〕

付記　註12、13、19、20の各論は、拙著『有島武郎の文学』〔昭49・6、桜楓社刊〕所収論文である。